

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

編輯 論議 每月一日發行
第四十八卷第三號 昭和十四年三月一日發行
大正四年六月二十一日第三號發行

號三第 卷(十四第

月三年四十和昭

論 叢

政府支出と所得増加……………文學博士 高田 保馬
横井小楠の經濟思想……………經濟學博士 本庄榮治郎
特殊リンク制の諸問題……………經濟學博士 谷口 吉彦

時 論

支那に於ける門戶開放……………法學博士 末廣 重雄
増稅案を論ず……………經濟學博士 汐見 三郎

研 究

神代に現はれし日本の創造の型……………經濟學士 中川與之助
公正價格の意義……………經濟學士 中 谷 實
靜態的貨幣理論と動態的貨幣理論……………經濟學士 服部 新一
複式簿記法の形成過程に就いて……………經濟學士 岡 本 愛 次

說 苑

ル・プレーの經濟發達階段說……………經濟學士 宮本 又次

附 錄

彙 報
外國雜誌論題

(禁 轉 載)

研 究

神代に現はれし日本的創造の型

—古事記^{*}を中心として—

中 川 與 之 助

は し が き

神話や傳説の批判の問題は暫く之を問はぬ。吾人は率直に神話として傳はる古傳説そのものに就て考察する。さて古傳説に残る神代に關する神話は實に潑刺たる創造的精神にみちみち、雄渾偉大なる創造の業績を物語るものである。即ち神話によれば神は先づ國土山川草木を、次にそれを主宰する神々を生み給ひ、遂にそれらの神の國を統一し給ふ大神が生まれまして茲に國家的體制が整へられ、天位繼承といふ不滅の大原理が確立して、それより地上國家の肇造と發展とに展開してゆくのであるが、か様な偉大なる國家創造の歴史は如何なる國の古傳説にも窺ひえざるものであり、我等の祖神の比類なき崇高なる創造的精神を物語るものである。我國は目下日支事變を契機として東亞の新秩序建設といふ空前の大聖業に着手してゐる。この秋に當りて神代に於ける祖神の創造的偉業を追懷してみるのも亦徒事ならざるべしと信ずるものである。吾人が神話に就て特に窺はんとすることは、

* 大倉精神文化研究所刊行の神典に收むる古事記に據る

かの偉大なる創造的精神と能力とは何處から來たか、又その創造的態度や方法は如何であつたかである。古傳説は周知の如く古事記・日本書紀に載せらるゝ所なるが、記・紀は必ずしも一致せず且つ日本書紀は支那的に加工せられてゐる所尠しとせずといはれてゐるので、茲では専ら古事記に據ることゝした。

寛博士は創造の根本たる皇産靈^{ひすぎ}を創設と名づけ之を創造・化育・生成に分ちて、「創造と申しますのは我が内部に輝いて居る所のまことに依て外のものを作ること」、「化育と申しますのは我が内部に輝いて居る所のまことに依て外部のものゝ一部に輝いて居るまことを刺激して刺激されたもの自身が其内部より自から己れを作つて行くこと」、「生成は自己のまことが内部から自分で己れを刺激して益々成長すること」と解説されてゐるが、茲に私の言はんとする創造も亦これらを含むものである。

さて神代に於ける神々の偉大なる創造的精神と能力とが何處から生まれたかを考察せんとするのであるが、五柱の別天神と所謂神代七世の神々は、何れも「獨神成り坐し^{*}」たのであつて他によりて産まれたものでない。従つてそれは神それ自體の自己發展であり宇宙生命の現れとみるの外ない。寛博士は宇宙人生の根元を「まこと」となし、神を「まこと」の顯現なりとしてゐらるゝ。かくの如く別天神並に神代七世の神々は吾々とは全く懸隔せる存在となつてゐるが、伊邪那岐命・伊邪那美命以後の神々の事柄は人間的姿態によりて描かれ神即人となつてゐる。私はこの人間的な岐・美二命以後の神々の創造を人間的な一視角から解説してみやうとするのである。岐・美二命以後の神々の創造に就て私の先づ述べんと欲することは、それが祖神の神意奉體であるといふことで

1) 寛克彦著、皇國精神講話、五七一五九頁

ある。詳言すれば神代に於ける創造は個々の神々の個人的意志の氣紛れた發露でなく只管に祖神の神勅を奉じて之を實現せんといふ所に、偉大なる創造的精神と能力とがあらはれたとみるのである。個人のための個人の意志に非ず天神即ち祖神にまつらふ心、無我無執「まこと」を以て自己を祖神に捧げたる時に、自己を天神・祖神の御精神に没入歸入せしめたる時に、換言すれば祖神と自己とが一體に融合したる時に自由自在潑刺々地の創造的精神と行動とが生まれたとみるのである。かの伊邪那岐命と伊邪那美命とは大八嶋國の外六島及び三十五神を産みませる偉大なる創造の神々なるが、そは實に天神の詔命を奉體實行せられたものである。即ち

「是に天神諸の命以て伊邪那岐命・伊邪那美命二柱の神に、是のたゞよへる國を修理固成せと詔ちて天沼矛を賜ひて言依さし賜ひき」

とある。「國土産み」の御業は天意奉行の聖業・公事としてなされてゐる。従つて又その「生み」の結果は或は是を天神に報告し或はこれに就て指導をお受けになつてゐる。(註一)

(註一) 岐・美二神が最初に生み給ひしみ子は水蛭子と淡島なりしが、何れも「み子の例には入らず」、「是に二柱の神議云りたまひらく今吾が生めりし子良はず。猶天神の御所に白すべしとのりたまひて、即ち共に參上りて天神の命を請ひたまひき。爾に天神の命以て布斗麻邇に卜相て詔りたまひらく云々」とある。

かくて岐・美二神が國土山川草木及び神々を生み給ひ、最後には伊邪那岐命が獨り神にならせられて、「生み生みて生みの終てに」三貴子即ち天照大御神・月讀命・建速須佐之男命の三神を得させられて、天照大御神には高天原を、月讀命には夜之食國を而して建速須佐之男命には海原を治らせ給ふに至るまで、岐・美二命の御活動は天神の意志を奉行して國土を修理固成することに終始するのである。岐・美二神の御使命がかくの如くなるが

故に、その生み給ひし多くの神々が何れもこの大使命のために活躍なされたることは言ふまでもない。

吾人は上に「國土生み」の御業は天意の奉行であつたとした。「國土生み」の後に多くの経緯を経て高天原の統一が成り、これより高天原の聖業は愈々葦原中國の經營に移るのであるが、この地上國家たる葦原中國の平定は又容易な業ではなかつた。然らばこの至難なる地上國家の鑿造は如何にして成し遂げられたか、その偉大なる國家創造力は何處から來たかといふに、吾人の觀る所によれば、それは一に天意奉行といふ無私無我の大至誠心の顯現となりて遂行されてゐる。即ち葦原中國は神が一個の私心を以て或は武力を以て征服或は支配したるものに非ずして、至誠の發露のまにまに、天神・祖神の大命たる國土の修理固成を遂行せられたものである。「うしはか」れてゐる地上國家を「しらさ」んが爲めになされたる大愛、大至誠の現はれである。

葦原中國の平定は高天原に坐ます天照大御神に對する出雲政府の國土奉還によりて一段落となるのであり、それまでには勿論多くの困難な問題がありそれらを解決するに多くの年月をも要してゐるが、葦原中國に對する對策に就て終始一貫してゐるものは地上國家を「治ら」さんといふ天意奉行である。地上の國家たる葦原中國を治らすといふ大聖業は、先づ須佐之男命が亂暴なる私行によりて、高天原を追はれて出雲國に降り給ふたことに始まる。須佐之男命も出雲國に降り給ふた頃は、高天原時代の横暴なる性格は消え失せて、天神としての本質と自覺に立ち還らせられ、足名椎・手名椎が何人なりやと尋ねたるに對して自ら堂々と「吾は天照大御神の伊呂勢なり故れ今天より降り坐しつ」と名乗りてその身分素姓を明にし給ふた。これに對して足名椎・手名椎は「然坐さは恐し」とその女を奉つてゐる。吾人はこの應答と畏命とをみて、高天原に於ける天神の徳風威力が無條件的に地

上をして讃仰畏服せしめてゐたことを知りうるのである。須佐男之命の出雲國に於ける後裔は天神系と國神系との二つの血をつぐこととなるが、その子孫の中から大國主命(別名、大穴牟遲神・葦原色許男神・八千矛神・宇都志國玉神)が現はれ給ふのである。この間に於ける出雲國土の經營に就ては、「國土を修理固成せよ」といふ高天原に於ける大精神・大原理・大威光が不斷に働きかけてゐるのである。例之、神産巢日命は御子少名毘古那神を遣はし給ひ、「故れ汝、葦原色許男命と兄弟と爲りて其の國を作り固めよ」と仰せられ、「故れ爾より大穴牟遲と少名毘古那と二柱の神相並ばして此の國を作り固めたまひき」とあるに徴しても明かである。出雲國の政治の理念的最高原理は、高天原に於ける神々の精神、遠くは伊邪那岐・伊邪那美命の天神より受けさせ給ひし「國土を修理固成せよ」との天意を奉戴することにある。私意や私心をすて、天神を「いつきまつる」ことにあつた。「この國土の修理固成」更には祖神をいつきまつる精神は出雲國家を創造發展せしめる指導原理であつた。このことは次の記事即ち、先に大國主命と共に國土を作り固め給ふた少名毘古那神が、後に常世國に度りましたる時、大國主命は愁ひまして「吾獨りして何かも此の國を得作らむ。孰れの神と與に吾は能く此の國を相作らまし」と告り給ふたこの時に海を光して依り來る神有り「我が前を能く治めてば、吾能く共與に相作り成してむ。若し然らずは國成り難し」と言ひ給ふたが故に、大國主命は「然らば治め奉らん狀は奈何にぞ」と申し給へば「吾をばも倭の青垣東の山の山上にいつき奉れ」とのり給ふたとあるによりても窺はれる。若し地上國家たる出雲國を始め葦原中國に、高天原の理想即ち天神の詔命たる國土の修理固成が完全に行はれてゐたならば、換言すれば地上國家即ち高天原であつたならば、かの天孫降臨の必要をみなかつたのかも知れぬ。然るに地上國家に於てその實現は

困難であつた。現實の地上國家は高天原からみれば混沌たるものであつたと想像される。このことは最初地上へ降臨の大命を受けさせ給ふた天忍穗耳命が天浮橋にたゞして「豐葦原之千秋長五百秋之水穗國はいたくさやぎてありけり」と仰せ給ひし言葉の中にも、高天原から「其の國の荒振る神等を言趣け和せ」とて神々の遣はされし言葉の中にも察せられるであらう。茲に於てか寛博士の言を藉るならば追進してやまざる高天原の大精神が發露して、萬難を排して天孫降臨の偉業に及ばざるをえなくなつたのである。されば天孫降臨の大精神は勿論地上國家を「しらす」ん爲であり、國土を修理固成せん爲めであり同時に又それは天意の奉行である。この大精神・大原理は例之、「爾れ高御產巢日神、天照大御神の命以て天安河の河原に八百萬神を神集へに集へて、思金神に思はしめて、詔りたまはく、此の葦原中國は我が御子の知さん國と言依さし賜へる國なり云々」にあるによりても、天孫降臨に當り出雲に使用して最後の外交的折衝に當りし、建御雷神等が大國主命に「天照大御神、高木神の命以て問ひに使せり。汝がうしはける葦原中國は、我が御子の知さん國と言依さし賜へり。故れ汝が心奈何にぞ」と問はせられた言葉によりても、更には愈々天孫日子番能邇々藝命に天照大御神が「この豐葦原水穗國は汝知さん國なり」と仰せになつたことに徴しても明白にあらはされてゐるのである。されば天孫を始め奉りそれ以來の地上國家の經營は一に天神・天祖の御意志を奉體すること即ち天神・天祖を「いつきまつる」ことにある。惟ふに地上國家の奉還から統一といふが如き大聖業の遂行せられえたる所以は、全くそれは私心私意の事業に非ずして、天神・天祖にあらはれし宇宙生命の大原理たる大愛・大至誠の發露なるが故である。若しそれが所謂覇者の覇權の爲なりせば必ずや鬭争に次ぐに鬭争を以てしたであらう。然るに一度高天原の天意が出雲政府に了解せらるゝ

や、多少の経緯があつたにせよ、大國主命の子をして「恐^{おそ}し此の國は天神の御子に立奉りたまへ」「此の葦國中
國は天神の御子の命の隨に獻らん」と言はしめ、大國主命をして遂に、「僕^{おれ}が子等二神の白せる隨に僕も違はじ。
此の葦原中國は命の隨に既に獻らん」といはしむるに至つたのである。これまでに至るには理知の神や外交の神
や武の神々等高天原の總力が動員されたやうであるが、國策創造の根本は天意の奉體であり至誠の發露であると
考ふるものである。

二

吾人は上述に於て人間的姿に於て描寫されたる神代の創造的精神を天祖・天神を「いつきまつる」こと、換言す
れば天神・天祖の神意を奉戴せんとする純一無雜の至誠であるとなした。かゝる創造的精神は神話の中に又種々
の精神的姿態に於て現はされてゐる。

その一は創造的精神としての清明心である。

寛博士は「清明心とは眞心です。まことです。まことを人の心として中しまする時には即ち清明心であります。」
といつてゐらるゝ様に清明心は天地創造の原理たる至誠の發露である。従つて清明心が又創造心である。速須佐
男之命が「海原を治らせ」との伊邪那岐命の大命を肯ぜられざる爲め高天原から追はれ給ひ、その事を天照大御
神に申し上げんと天なる大御神の許に參らるゝと、大御神は「我が那勢命の上り來ます由は必ず善しき心ならじ、
我が國を奪はむと欲すにこそ」と宣り給ひ、武装を施して待ち給ひしに、命は「僕は邪き心なし……異しき心
なし」と辯明し給ふた。大御神は「然らば汝の心の清明きことは何以にして知らまし」と問はせ給ふ。これに對

して命は「各うけひて子生まな」と答へられ、それより清明心の證據に多くの神々を生まれ給うたことゝなつて居り、命は「我が心清明き故に我が生めりし子手弱女を得つ」とも申されてゐる。即ち茲では清明心は創造の精神として描かれてゐる。

その二は創造的精神として禊である。

禊の結果は清明心に立ち返へることであるが、禊は一度汚されし身心を清むる懺悔であるが故に、この點に於て第一の如く最初からの清明心と異なる。一度汚れたる身心が禊によりて偉大なる創造的心身として再現するの例は、かの伊邪那岐命が神去りまししも伊邪那美命を慕はせ給ふ餘り、黄泉の國まで到り給ひしが遂にそこから逐はれ給ひ、「吾はいなしこめしこめき穢き國に到りて在りけり、故れ吾は御身の禊を爲な」とのり給ひて、日向橘小門之阿波岐原に出でまして禊ぎ祓ひ給ふた。その時「故れ投げ棄つる御枝に成りませる神の名は衝立船戸神、次に投げ棄つる御帶に成りませる神の名は道之長乳齒神、次に投げ棄つる御裳に成りませる神の名は時置師神、次に投げ棄つる御衣に成りませる神の名は和豆良比能宇斯神、次に投げ棄つる御禪に成りませる神の名は道俣神、次に投げ棄つる御冠に成りませる神の名は飽咋之宇斯能神、次に投げ棄つる左の御手の手纏に成りませる神の名は奥疎神、次に奥津那藝佐昆古神、次に奥津甲斐辨羅神、次に投げ棄つる右の御手の手纏に成りませる神の名は邊疎神、次に邊津那藝佐昆古神、次に邊津甲斐辨羅神の十二神、「是に上瀬は瀬速し下瀬は瀬弱しと詔りごちたまひて、初めて中瀬に墮りかづきて滌ぎたまふ時に成り坐せる神の名は八十禍津日神、次に大禍津日神。此の二神は其の穢き繁國に到りましし時の污垢に因りて成りませる神なり。次に其の禍を直さむと爲て成りませる神の名

は神直毘神、次に大直毘神、次に伊豆能賣神、次に水底に滌ぎたまふ時に成りませる神の名は底津綿見神、次に底筒之男命。中に滌ぎたまふ時に成りませる神の名は中津綿津見神、次に中筒之男命。水の上に滌ぎたまふ時に成りませる神の名は上津綿津見神、次に上筒之男命。……是に左の御目を洗ひたまひし時に成りませる神の名は天照大御神、次に右の御目を洗ひたまひし時に成りませる神の名は月讀命、次に御鼻を洗ひたまひし時に成りませる神の名は建速須佐男之命」の十四柱である。

その三は創造的精神としての愛である。先づ「國土生み」の御業は伊邪那岐命と伊邪那美命の大なる愛によりて始められ、國土山川・六嶋・三十五神をお生みになりしことは既に述べし如くなるが、この男女兩神の愛の如くに熱烈偉大なりしかは、伊邪那美命が火之迦具主神を生みませる爲に神去り給ひし後に、伊邪那岐命は「愛しき我が那邇妹命や子の一木に易へつるかも」と御枕邊に匍匐ひて嘆かせ給ふたその時、御涙に泣澤女神が生りませるとあるが如き、又、伊邪那岐命が伊邪那美命を御愛慕の餘り黄泉國までに御出かけになり、伊邪那美命に、「愛しき我が那邇妹命吾汝と作れりし國未だ作り竟へずあれば還りませね」とて切なる御愛情を御示しになりし如き、其の他、須佐男之命と天照大御神、須佐男之命と櫛名田比賣、大國主命と須勢理毘賣命等との御創造は、何れも宇宙の大精神たる純真なる至愛の發露ならざるはない様に描かれてあるのである。

その他創造的精神としての公憤義憤・犠牲心至誠心なども窺はれる。公憤義憤の例としては、前述の如く伊邪那美命は火之迦具土神を生みませる時に神去り給ひしのであるが、伊邪那岐命は國土の修理固成といふ天神からの天意奉行を中折せしめたりとの公憤義憤から火之迦具土神の頸を斬り給ふた。「爾に其の御刀の前に著ける血、

湯津石村に走り就きて成りませる神の名は石折神、次に根折神、次に石筒之男神、次に御刀の本に著ける血も湯津石村に走り就きて成りませる神の名は甕速日神、次に樋速日神、次に建御雷之男神……次に御刀の手上に集れる血、手俣より漏くき出でて成りませる神の名は闇游加美神次に闇御津神」とあるが如きは、正義や公憤義憤が大創造となりて現はれたとみうるであらう。このことは又、殺されましゝ迦具土神の頭に正鹿山津見神、胸に涙膝山津見神、腹に奥山津見神、陰に闇山津見神、左手に志藝山津見神、右手に羽山津見神、左足に原山津見神、右足に戸山津見神が成りませるといふことゝ共に火之迦具土神の偉大なる犠牲心によりてあらはれし大なる創造とも考へらるゝのである。又、創造的精神としての至誠心のことゝ、木花之佐久夜毘賣命が邇々藝能命に御自分の御貞操の正しきことを證據立てんとして、「吾が姪める子、若し國神の子ならんには産むこと幸からじ。若し天神の御子にまさば幸からん」とのり給ひ、産みますとき産室なる八尋殿に火をつけその火の盛に燃ゆる時に三子をあげさせられたといふ物語にもあらはされてゐる。

三

神代に於ける創造的精神の本質並にその表現の姿は上の如くなるが、吾人は進んで創造の態度方法を考察してみやうと考へる。

古事記にあらはるゝ創造は、吾人の既に述べたる如く、(一)國土山川草木即ち自然を生むこと、(二)神々を生むこと、(三)諸政策を創ることに分ちうるのであるが、今それらの創造に於ける態度方法を觀るに單獨になされる創造と協力による創造との二つに分ちうる。

第一單獨になさるゝ創造 之は創造が他との協力によりしこと明かならず單獨の力によりてなされし如きものを指すのであるが、この場合も詳しくいへば、(a)國土や自然が單獨に生まれし場合(b)神々が單獨に生まれし場合(c)政策を單獨で創始せる場合の三つとなる。(a)伊邪那岐・伊邪那美二神以後の國土自然は二神の生みませしものと考ふべきであらうが、それ以前の別天神時代に於ける「國稚く浮脂の如くして久羅下なすたゞよへる時云々」の稚き國は獨りでか或は誰かによりて生まれしものか明にするをえない。蓋し所謂造化の三神たる天之御中主命・高御産巢日神・神産巢日命は何れも「獨神成り坐して身を隠したまひき」とあるからである。後に至り獨り神の力によりて生まれしものかと思はるゝものに、かの速須佐男之命に殺され給ひし大宜津比賣神の御身に生りし蠶と稻・粟・小豆・麥・大豆の五穀がある。然しこれも既に他神との協力によりて孕まれてゐたものと解すべきであらうか。(b)神々が單獨に生まれましゝ如く、或は單獨にて生みましゝ如くみゆる場合は イ、高天原に生まれましゝ前述の所謂造化の三神の外、國常立神・豐雲野神の二柱の神あり。何れも「女男耦て成坐る神たちと別ちて、唯一柱づゝ成坐して配坐神ならひますなし」ロ、伊邪那岐命が神去りましゝ伊邪那美命を哭き給ひし御涙に生りし泣澤女神あり ハ、伊邪那岐命の爲に殺され給ひし火迦具土神の御體になりし八柱の神あり ニ、伊邪那岐命の禊の行によりて生まれましゝ神々二十六柱ある。以上の神々の御出生は人間的なそれとは非常に異つたものとなつてゐる。(c)政策が單獨で創始せられたる場合は殆どなく多くは神々の御協議の上で行はれてゐる。唯かの伊邪那岐命がその三貴子即ち天照大御神・月讀命・速須佐男之命に各々高天原・夜食國・海原を治らせ給ふやうに御分擔を御指定に相成るに當り誰々に御神議になつたといふことは書にはみえぬが勿論それは私意專行ではなく

天意の御奉體であり多くの神々の御意志を實現なされたものと拜祭される。

第二協同によりなされし創造　これは人間的恣態に於て明かに人間的な協力として描かれてゐる創造を意味する。これも細分して(a)協力による國土自然の創造(b)協力による神々の創造(c)協力による政策の創造の三つとなす。

(a)協力による國土自然の創造、國土自然は天神より「是のたゞよへる國を修理固成せ」との詔を奉戴せられたる男女の神伊邪那岐命・伊邪那美命によりて生み成されてゐる。この二神の生み給ひし國々は淡道之穗之狭別嶋・伊豫之二名嶋・隱伎之三子嶋・紫紫嶋・伊伎嶋・津嶋・佐度嶋・大倭豊秋津嶋の所謂大八嶋及び古備兒嶋・小豆嶋・大嶋・女嶋・知訶嶋・兩兒嶋の六嶋であり、同時に山川草木風雨等の自然も生みましゝものと思はれる。(b)協力による神々の創造、男女の神の協力によりて生まれませし神々の數は數多くその例をみる。イ、伊邪那岐・美二神の生みませし神は大事忍男神・石土毘古神・石巢比賣神・大戸日別神・天之吹男神・大屋毘古神・風木津別之忍男神・大綿津見神・速秋津日子神・速秋津比賣神等三十五柱の多きに上る。尤もこの神の數の計算に就ては古來諸説あるのであるが、それは本文にては重要に非るが故に之に觸れぬこととする。ハ、天照大御神と須佐男之命との間には三女神と五男神が生まれましてゐる。ニ、須佐男之命と櫛名田比賣との間には八嶋士奴美神、又同じく大山津見神の女、神大市比賣との間には大年神・宇迦之御魂神あり、ホ、大國主命と多紀理毘賣命との間に阿遲鉏高日子根神・高比賣命を、又、神屋楯比賣命との間には事代主命等々を御生みになつてゐるのである。ヘ、大年神と神活須毘神の女、伊怒比賣との間には大國御魂神・韓神・曾富理神・向日神・聖神の五柱が、又同神と香用比賣との間には大香山戸臣神・御年神の二柱が、又、天知迦流美豆比賣との間には奥津日子神・奥

津比賣命・大山咋神・庭津日神・阿須波神・波比岐神・香山戸臣神・羽山戸神・庭高津日神・大土神の九柱の神が生まれましてゐる。チ、天津日高日子番能邇邇藝能命と木花之佐久夜毘賣命との間には火照命・火須勢理命・天津日高日子穗穗手見命の三柱が、又、リ、火遠理命と海神の女豊玉毘賣命との間には天津日高日子波限建鸕草薙命・天葦不合命あまのあはれ生まれましてゐる。(c)協力による政策の創造、神代に於て重要國策を決定せらるゝに當りては殆ど常に多くの神々に議り給ふてゐることは見遁すべからざる所であらう。イ、速須佐之男命の暴行を御怒りになり、天照大御神は天岩屋戸に隠れましになり高天原も葦原中國も暗闇となり、さ乍ら「常夜往く」如くなつた。この時に「八百萬神、天安之河原に神集ひ集ひて」その對策を講ぜられたことは人のよく知る所であが、衆智・衆力の總動員によりて天岩戸から天照大御神を「引き出しまつる」大業が遂に成效したのである。思金神・伊斯許理度賣命・玉祖命・天兒屋命・布刀玉命・天手力男神・天宇受賣命等が各得意の能力を御發揮になされしことに就ては詳記の要はないであらう。ロ、前にも述べし所なるが、神産巢日命が御子少名毘古那神に對して、「葦原色許男命と兄弟となりてその國を作り堅めよ」と仰せられし如き、又、少名毘古那神が去りまし後、葦原色許男命が「吾れ獨して何かも此の國を之作らん云々」と嘆ぜられしが如きは、明に出雲國土の經營が協力によりてなされしものなることを語るものであらう。ハ、高天原の御聖業が愈々地上國家たる葦原中國に及ばんとしたる時、所謂天孫降臨の大聖業が成就するまでには、出雲政府との外交的接衝にも多年を要してゐるのであるが、その對策を次々と御決定になるには、高御産巢日神・天照大神が「天安河の河原に八百萬神を神集へに集へ」させられて、御神議になつてゐるのである。殊にかやうな重要問題に祖神たる高御産巢日神が常に現はれまして子孫と御協力になる

ことは見遁してはならぬ尊きことである。ニ、天孫が愈々御降臨になるに當りては天兒屋命・布刀玉命・天宇受賣命・伊斯許理度賣命・玉祖命の五伴緒の外、常世思金神・手力男神・天石門神等が相加はりになつてゐる。御降臨の後、地上國家の經營に當りて天孫を御扶翼申し上げたことは言ふまでもなからう。

以上吾人は創造の態度・方法を單獨的・協同的といふ見地から述べたのであるが、これは又別の見地からも觀らるゝであらう。就中、創造に於ける荒魂わらたまと和魂にぎたまの結合といふことである。國土を生みまし、伊邪那岐・伊邪那美神二神の中、伊邪那岐命は武勇の性格即ち荒魂を御所有になり、伊邪那美命は女神にて和魂を顯現なされた。

かくてこの偉大なる荒魂と和魂の結合によりて雄渾なる創造が行はれた。天照大御神と須佐男之命の場合も亦前者は偉大なる和魂を後者はこれに劣らぬ偉大なる荒魂を御所有になりしことは多くの御行跡を通して窺はれる所である。而して此の二つの偉大なる和魂と荒魂の結合によりて三女神・五男神が生まれましてゐる。その他男女の神の創造にして荒魂と和魂の結合ならぬものはない様である。次に吾人の更に一言せんとするは、天神と國神との結合の容易に行はれてゐることである。天神系と國神系の階級的對立とか鬭争といふものはみつからぬ。出雲に降りまし、天神系の須佐男之命が國神大山津見神の女櫛名田比賣にお娶ひなされし如き、或は又邇々藝能命が御降臨の後、矢張國神大山津兄命の女木花之佐久夜毘賣にお娶ひ遊ばし、如きこれを例證してゐる。

さて上に述べ來れる創造に就て、人々は尙、建設の爲めには破壊も行はれてゐるし多くの鬭争や苦難のあつたことを忘れてはならぬ。然も破壊・鬭争努力の後に必ず偉大なる建設・創造發展の行はれてゐることは深く注意すべき所であらう。

結 言

以上、吾人は古事記を中心として神代に現はれし創造を考察した。今述べ來つた所を顧みてその要綱を一括せんに、日本の古傳説にあらはれし神話の一大特質は國家の創造史であるといふことである。詳言すれば神代から日本國家が如何に肇造せられて來たかの史話であつて個人の哀話や物語或は一場の社會劇ではない。日本神話は國土の生成・統一・發展の神話である。而して國家創造の根本精神は祖宗の神々の御意志を繼承奉戴すること、換言すれば祖神をいつきまつることにあり、民を治らすことにある。日本では神話に於ても神をまつること即ち政治となつてゐる。従つてかゝる國家創造の精神は至誠心であり大愛であり清明心であり、正義心であり喫ぎする心である。他面からいへば無我であり無偏・無執であり自彊不息の精神でもある。更に日本神話の創造は和魂と荒魂の力でありそれらの結合の結果でもある。次に創造の様式をみるに單獨に即ち神の自己發展としても現はれてゐるが、又多く神々の協力によりても行はれてゐる。而して偉大なる創造には勿論幾多の苦難も伴ふが、しかも私なき天意奉行の大至誠は遂に必ず大業を成就せしめてゐる。神話を通して吾人に切實に感ぜしむるのは、止むにやまれぬ抑ふるに抑へきれぬ雄渾至大なる創造精神の躍動であり、「まごころ」の發現である。高天原の統一から葦原中國の肇造へと宇宙創造の大生命の活動は一刻も息むことがない。神話は實に彌榮の精神にあふれてゐる。それはかの外國の神話にみゆる個人的な享樂的な或は贖罪的な宿命的な・霸者的な史話とは根本に於てその本質を異にするのである。(一四・二・一四)